

2024 年度  
部局自己点検・評価報告書  
(評価対象年度：2023 年度)  
(HP 掲載用)

新潟薬科大学  
応用生命科学部  
大学院応用生命科学研究科

質保証推進委員会

## 目 次

### 1. まえがき

### 2. 評定について

### 3. 応用生命科学部 自己点検・評価

#### I. 教育活動について

##### I-1. 学生の受入れについて

(1) 広報活動について

(2) 入学者選抜・入学試験結果について

(3) 新入学生の状況について

##### I-2. 学習成果について

(1) 教育課程の編成・実施について

(2) 学修成果について

(3) 授業運営について

##### I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について（学部、研究科共通）

(1) 学生修学・生活支援について

(2) キャリア支援について

##### I-4. AP、CP、DP、3 方針の整合性について

#### II. 研究活動について（学部、研究科共通）

#### III. 社会連携・社会貢献活動について（学部、研究科共通）

III-1. 国際交流について

III-2. 高大連携について

III-3. 地域連携について

#### IV. 教員・教員組織について

IV-1. 教員組織について

IV-2. FD 活動について（学部、研究科共通）

#### V. 定員・学費の適切性について

### 4. 大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価

#### I. 教育活動について

##### I-1. 学生の受入れについて

##### I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について

##### I-3. AP、CP、DP、3 方針の整合性について

#### II. 教員・教員組織について

#### III. 定員・学費の適切性について

## 1. まえがき

応用生命科学部、大学院応用生命科学研究科における各点検項目に対する、質保証推進委員会の自己評価は、「2. 評定について」に記載のとおりとした。

応用生命科学部、大学院応用生命科学研究科では、2023 年度においては、外部評価委員による評価を受け入れ、積極的な点検・評価を行った。本学部、本研究科が社会の重要な構成員であり続けるためには、教育・研究活動の目標をしっかりと定め、課題解決に取り組み、常に点検・評価をすることが大事である。自己点検・評価とは自己満足のためでなく、教育・研究の質の向上を目指す自律的改革をなすものである。自己点検・評価による現状の把握と分析は、課題の抽出と改善だけでなく、学部/研究科の発展に寄与する新しい学びに繋がるため、新たな PDCA サイクルの起点として、「2024 年度 部局自己点検・評価報告書(評価対象年度：2023 年度)」を活用していきたいと考えている。

2024 年 10 月 29 日

応用生命科学部長、研究科長  
質保証推進委員長、研究科質保証推進委員長  
高久 洋暁

## 2. 評価について

### I. 評価の基準

2023年度の各項目における評価は、以下のSからCの4段階評価で自己評価した。

S	高い水準で取り組み、卓越した成果があがっている。または特筆すべき取り組みを行っている。
A	適切な取り組みがなされ、成果があがっている、または近く確実な成果が見込まれる。
B	積極的な取り組みがなされているが、十分な成果には至っていない。
C	ほとんど取り組みがなされておらず、成果があがっていない。

### II. 評価一覧

応用生命科学部 自己点検・評価（質保証推進委員会による自己評価）

項目名	評価
広報活動について	B
入学者選抜・入学試験結果について	B
新入学生の状況について	A
教育課程の編成・実施について	A
学修成果について	A
授業運営について	A
学生修学・生活支援について	A
キャリア支援について	S
AP、CP、DP、3方針の整合性について	A
研究活動について（学部、研究科共通）	A
国際交流について	A
高大連携について	A
地域連携について	A
教員組織について	B
FD活動について（学部、研究科共通）	B
定員・学費の適切性について	B

大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価（研究科質保証推進委員会による自己評価）

項目名	評価
学生の受入れについて	B
教育課程、学修成果、授業運営について	B
AP、CP、DP、3方針の整合性について	B
教員・教員組織について	B
定員・学費の適切性について	B

### 3. 応用生命科学部 自己点検・評価

#### I. 教育活動について

##### I-1. 学生の受入れについて

###### (1) 広報活動について 《点検担当：松本委員、入試課》

###### 【事実(データ)に基づく現状説明】

2024年度の入学者は、応用生命科学科においては78名（前年比-2名、対前年比98%）、定員充足率65%と入学定員未充足だった。生命産業ビジネス学科においては、入学者54名（前年比；+3名、対前年比106%）、定員充足率120%となり、2年連続で入学定員を充足した。（【資料3\_I-1\_(1)-1】）

2023年6月OC参加者数は、応用生命科学科、生命産業ビジネス学科全学年において、それぞれ前年比80%、116%であったが、6月から8月の夏季オープンキャンパスの全学年総参加者数は、応用生命科学科で前年比139%、生命産業ビジネス学科で前年比152%となった。この期間における広報活動で前年度と異なるところは、7月中旬から8月中旬にかけて、応用生命科学部限定のTVCMを重点的に実施したことである。（【図表3\_I-1\_(1)-2：過去2年の夏季オープンキャンパスへの参加者】）

オープンキャンパスへの全学参加者は増加したが、全学出願率は前年度から減少した。（【資料3\_I-1\_(1)-4】）

入学試験合格者の手続者数は、応用生命科学科109名（前年比+13名）、生命産業ビジネス学科61名（前年比+2名）であった。入学者数は応用生命科学科78名（前年比-2名）と減少した。（【資料3\_I-1\_(1)-5】）

ガイダンス等実施数は、前年度より43件増加した。（【資料3\_I-1\_(1)-6】）また、資料請求者数も前年度より大学全体で764件増加したが、5年連続で資料請求者に対する受験者、入学者の割合は減少し、特に応用生命科学科で大きく減少している。（【資料3\_I-1\_(1)-7】 【資料3\_I-1\_(1)-8】）

応用生命科学科の入学者数は78名（前年比-3名）のうち、新潟県外入学者数は6名（前年比-6名）で、前年度よりも減少した。（【資料3\_I-1\_(1)-9】）

###### 【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題1	応用生命科学科の入学者の減少
上記の方策	<p>応用生命科学科入学者数増加のためには、本学に興味のある学生を増やすという根本対策が必要で、KPIとして、OC参加者数は重要となる。</p> <p>改善に向けて、応用生命科学部の魅力となる広報内容の検討、広報手段（大学単位、学部単位、学科単位の検討、広報アドバイザーとの連携）の検討、広報効果（広報媒体を介した資料配付等）の検証、OC集客などを示し、実施する。</p>
課題2	県外入学者の減少
上記の方策	<p>応用生命科学部への県外入学者数増加のためには、県外における丁寧で地道な高校訪問が必要であると考え。KPIとして、OC参加者数、県外ガイダンスにおけるブース来場者数は重要である。また、応用生命科学部の魅力となる広報内容の検討、広報効果（広報媒体を介した資料配付等）の検証、OC集客、全学的な県外の広報担当者の設置などを示し、実施する。</p>

###### 【根拠データ、資料】 ※赤字は学外非公表

資料3_I-1_(1)-1	過去6年の入学者数と学部全体の定員充足率
資料3_I-1_(1)-2	過去2年の夏季オープンキャンパスへの参加者
資料3_I-1_(1)-3	過去4年のオープンキャンパスへの参加者数（3年生+既卒生）

資料 3_I-1_(1)-4	過去4年のオープンキャンパスからの出願率（全学）
資料 3_I-1_(1)-5	過去4年の手続き者、辞退者、入学者の推移
資料 3_I-1_(1)-6	過去5年のガイダンス等実施状況
資料 3_I-1_(1)-7	過去5年の資料請求者状況
資料 3_I-1_(1)-8	過去5年の資料請求者に対する受験者、入学者の割合
資料 3_I-1_(1)-9	過去4年の都道府県別入学者

(2) 入学者選抜・入学試験結果について 《点検担当：小瀬委員、入試課》

【事実(データ)に基づく現状説明】

<p><u>入学者選抜方法とアドミッション・ポリシーの整合性</u> 【資料 3_I-1_(2)-1】</p> <p>各学科で策定された入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー：AP）に基づき入学者選抜を行っており、各入試区分において課す試験内容と AP との対応も明確に定め、学生募集要項で公表している。</p> <p><u>全体的な出願・入学状況の推移</u> 【資料 3_I-1_(2)-2】</p> <p>2024 年度の入学者は、応用生命科学科 78 名（前年比-2 名、対前年比 98%）、定員充足率 65%であった。同学科の 2023 年度入試における区分ごとの内訳（志願数/入学数）は、総合型 8/8 名、学校推薦型 27/27 名であり、一般選抜個別方式(含併願・AB 両日程受験)は 92/30 名、共通テスト利用方式(含併願)は 97/15 名であり、2024 年度入試は総合型 8(±0)/8(±0)名、学校推薦型 26(▼1)/26(▼1)名であり、一般選抜個別方式(含併願)は 75(▼17)/29(▼1)名、共通テスト利用方式(含併願)は 92(▼5)/15(±0)名であった。</p> <p>生命産業ビジネス学科は、入学者 54 名（前年比；+3 名、対前年比 106%）、定員充足率 120%であった。同学科の 2023 年度入試における区分ごとの内訳（志願数/入学数）は、総合型 8/8 名、学校推薦型 23/23 名であり、一般選抜個別方式(含併願・AB 両日程受験)は 29/6 名、共通テスト利用方式(含併願)は 54/14 名であり、2024 年度入試は総合型 8(±0)/7(▼1)名、学校推薦型 28(△5)/27(△4)名であり、一般選抜個別方式(含併願)は 32(△3)/10(△4)名、共通テスト利用方式(含併願)は 47(▼7)/10(▼4)名であった。なお、一般選抜の個別方式 I 期入試に関しては、入試実施日数が、2023 年度は A・B 日程の 2 日間であったが、2024 年度は 1 日間に変更されている。</p> <p><u>一般公募制・高大連携推薦の事前課題化の評価</u> 【資料 3_I-1_(2)-2】</p> <p>志願者のさらなる増加を目指して、2024 年度入試より、学校推薦型の一般公募制、高大連携講座における基礎学力調査を廃止し、事前課題の提出に切り替えた。また、一般公募制においては新たに II 期（12 月実施）を取り入れた。結果、2023 年度入試の 5/4 名(応/ビ)から、8/8 名に増加した。その一方で指定校制は 22/19 から 18/20 と応用でやや減少傾向であった。これを踏まえて受験負担の軽減による出願促進を企図して指定校制においては 2025 年度入試から事前課題の廃止を決定している。</p> <p><u>県外志願者の減少の評価</u></p> <p>入学者に占める県外出身者は 2023 年度入試においては応用生命科学科 11/80 および、生命産業ビジネス学科 4/51 であったが、2024 年度入試においてはそれぞれ 6/78 および、6/54 であり、応用生命科学科の県外志願者が顕著に減少した。</p> <p><u>高大連携講座の評価</u> 【資料 3_I-1_(2)-3】</p> <p>2024 年度入試から応用生命科学講座、生命産業ビジネス講座の受講に伴う加点制度を開始した。高大連携講座の入学者数は 2023 年度の 4/2(応/ビ)に対して 2024 年度は 2/2 であった。2022 年度は 25/14 の申込があり 13/9 に修了証を発行し、2023 年度は</p>
---

16/19の申込があり8/11に修了証を発行した。講座の活性化にも目立った寄与は見受けられなかった。

**国公立大学における専願入試【資料3\_I-1\_(2)-5】**

国公立大学における専願入試が年々拡充傾向にある。ここ5年間（R1=H31年度入試とR6年度入試の比較）で、全国の国公立大学における総定員は総合型選抜において5203名から7920名（52%増、総定員の6.1%）であり、学校推薦型選抜においては20187名から21751名（7.7%増、総定員の16.9%）である。今後もこの傾向が強まると、現状の専願のみの総合型および学校推薦型選抜制度では、国公立併願層の専願入試志願への移行に伴い、これらの生徒に対する機会損失の増加が懸念される。

**私立大学における大学入学者選抜区分【資料3\_I-1\_(2)-6】**

2023年度入試における選抜方法毎の入学者数は私立大学においては48.0%/21.1%/30.9%（一般選抜/総合型選抜/学校推薦型選抜）である。一方、応用生命科学部においては2023年度（56.2%/10.0%/33.8%）、2024年度（56.4%/10.3%/33.3%）であり、全国との比較では総合型選抜が少なく、一般選抜が多い傾向にある。生命産業ビジネス学科においては2023年度（39.2%/15.7%/45.1%）、2024年度（37.0%/13.0%/50.0%）であり、応用生命科学科と同様に総合型選抜が少ないが学校推薦型が多いため、専願入試全体では全国を上回っている。

**【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】**

<b>課題1</b>	併願層の出願（主に応用生命科学科向け）
<b>上記の方策</b>	定員割れが恒常化している応用生命科学科の主要な志望層の一つである理系国公立併願層の志願を促すことが必要である。併願層の志願対策を協議し、改善に向けた具体的な施策（総合型選抜および学校推薦型選抜において、併願制の枠の設定等）を検討し、実施する。
<b>課題2</b>	私大志願層の専願入試への出願（両学科向け）
<b>上記の方策</b>	定員割れが恒常化している応用生命科学科の入学者数増加へ向け、専願入試への出願数の増加が必要である。専願入試への出願数増加へ向けた対策を協議し、改善に向けた具体的な施策（競合私大の選抜方法調査を踏まえた選抜内容の検討、高大連携講座出願数増加へ向けた認知度の向上、誘導など）を示し、実行する。

**【根拠データ、資料】 ※赤字は学外非公表**

資料3_I-1_(2)-1	APの入学者選抜におけるその評価法
資料3_I-1_(2)-2	2023年度および2024年度入学試験 入学予定者数一覧
資料3_I-1_(2)-3	2022年度および2023年度高大連携講座参加者数一覧
資料3_I-1_(2)-4	2023年度および2024年度入学試験 辞退者数一覧
資料3_I-1_(2)-5	令和6年度国公立大学入学者選抜の概要（文部科学省資料より抜粋）
資料3_I-1_(2)-6	大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究調査報告書（令和5年度 文部科学省委託調査報告書より抜粋）

(3) 新入学生の状況について <点検担当：重松委員、教務第一課>

【事実(データ)に基づく現状説明】

■ (1年後の)留年/休学/退学状況

- ・2023年度入学生の1年後の留年/休学/退学状況は、応用生命科学科において、留年1名、休学(2024年度前期)1名、退学1名であった(前年比;留年-3名、退学-4名)。【資料3\_I-1\_(3)-1】生命産業ビジネス学科において、留年0名、休学0名、退学1名であった(前年比;留年-3名)。【資料3\_I-1\_(3)-2】2022年度入学生と比較すると、両学科とも留年、退学学生が減少していた。なお、2022年度と2023年度の新入生に対する活動の違いは、フレッシュャーズ・セミナーの合宿ならびにアドバイザー活動の再開がある。

■ 入学前教育

- ・専願入試での合格者を対象とした入学前教育を実施した。2024年1月20日、2月24日、3月9日にスクーリングを行い、これに加えて、応用生命科学科の入学生には化学、生物、英語の入学前課題を、生命産業ビジネス学科の入学生には経済・経営学、英語の入学前課題を課した。

■ 新入生アンケート(高校時履修内容調査含む)

- ・共通テスト(センター試験)を受験した割合は、応用生命科学科で70%の学生が受験しているのに対して、生命産業ビジネス学科では61%の学生が受験していた。
- ・受験勉強をした科目については、応用生命科学科では、数学I(60%)、数学A(59%)、数学II(55%)、数学B(54%)を選んだ学生が多く、理科では化学(51%)と生物(38%)が物理(14%)に比べて多かった。一方、生命産業ビジネス学科では、数学I(26%)、数学A(21%)、数学II(20%)、数学B(17%)を選んだ学生が多く、地歴公民では、政治経済(18%)、日本史(17%)を選んだ学生が多かった。【資料3\_I-1\_(3)-3】
- ・生物と化学については高校で学んだかどうかを調査した。応用生命科学科の学生では、生物基礎97%、生物63%、化学基礎96%、化学66%の履修率が示された。生命産業ビジネス学科では、生物基礎98%、生物41%、化学基礎98%、化学37%の履修率だった。

■ プレイスメントテスト

- ・新入学生に対するプレイスメントテストとして、応用生命科学科においては化学、生物、英語の学力調査を、生命産業ビジネス学科においては英語の学力調査をそれぞれ実施した。なお、2023年度の化学と生物のプレイスメントテストは改訂された問題、採点方法により実施した。

(1) 応用生命科学科

- ・化学の平均得点率は、2023年度は35%であった。問題・採点方法を改訂しているもので、比較は難しいが、2021年度30%、2022年度32%であるので、成績は増加傾向と考えられる。ヒストグラムは平均得点率を含む30~39%が最大数を示し、高得点側にすそ野が広がっている形状であった。また、2022年度と同様に「イオン反応」の正答率が低かった【資料3\_I-1\_(3)-4】
- ・生物の平均得点率は、2023年度は63%であった。問題を改訂しているもので、比較は難しいが、2021年度63%、2022年度63%であったので、ほぼ同等の学力の学生が入学したと考えている。2023年度のヒストグラムは50~59%の得点率が最大数を示し、高得点率側が低得点率側よりも高い形状であった。また、2022年度と同様に、「生物の分類」、「細胞小器官」、「細胞分裂」、「タンパク質」についての正答率が比較的 low だった。【資料3\_I-1\_(3)-5】
- ・英語の平均得点率は、2023年度は53.0%であった。2022年度48.8%、2021年度49.9%であった。ヒストグラムを見ると2023年度は59%~69%が最大数を示し、低得点率



側に多くの学生が分布していた。2022年度に見られなかった80%以上の得点率の学生がおり、2022年度に見られた19%以下の得点率の学生はいなかった。これらのことから、2023年度の入学生は2022年度に比べて英語の学力が若干向上している。

【資料3\_I-1\_(3)-6】

## (2) 生命産業ビジネス学科

・生命産業ビジネス学科では、2023年度の英語の平均得点率は59.3%であった。2022年度58.2%、2021年度59.5%であった。ヒストグラムを見ると、2023年度は59%～69%が最大数を示し、ほぼ正規分布的な形状を示した。2022年度は入学生数が少ないこともあり、20-99%の間にはほぼ一定の数が分散している傾向が認められた。2023年度は2022年度に比べて、若干ではあるが入学生の英語力は高いと考えられる。

・なお、プレイスメントテスト結果を活用した新入生の学力状況については、授業内容の改善に繋げるため、教授会において情報を共有した。【資料3\_I-1\_(3)-6】

・シームレス教育プログラムに基づき、応用生命科学科のプレイスメントテストの結果、化学の得点率が低かった学生(得点率24%以下21名)および高校で化学を履修していない11名には「基礎化学I」、生物の得点率が低かった学生(31点以下の学生21名)には「基礎生物学」の履修を推奨した。「基礎化学I」「基礎生物学」は、それぞれ高校で化学、生物を履修しなかった学生を対象とした授業内容になっている。また、応用生命科学科の英語のプレイスメントテストの結果は「英語I」のクラス編成に供した。

### ■ 1年次成績、プレイスメントテスト成績、入試区分の関連性

・プレイスメントテストの順位と1年次3月時点での成績の相関関係を解析した。応用生命科学科のプレイスメントテスト(生物)、プレイスメントテスト(化学)、プレイスメントテスト(英語)それぞれの順位と、1年後(1年次3月時点)の順位との相関関係を図示した。ばらつきが大きく決定係数が低かったが、いずれの場合も右肩上がりの傾向を示したことから、各科目のプレイスメントテストの順位は、1年後の順位とある程度正に相関していた。特に英語においては、決定係数が比較的高めであったため、3科目の中では英語のプレイスメントテストの順位が、1年後の順位とやや高めに相関していた。一方、いずれの科目においても、線形近似曲線における傾きが1を下回り、 $y = x$ の直線と横軸の中央付近、概ね40位のところで交差した。このことから、プレイスメントテストの順位が概ね40位以下であったが、1年間の学修により順位を上げた学生(グラフ中 $x \geq 40$ ,  $y = x$ の直線の右下の部分)、プレイスメントテストの順位が概ね40位以上であったが、1年間の学修により順位を下げた学生(グラフ中 $x \leq 40$ ,  $y = x$ の直線の左上の部分)がある程度の割合存在していた。

・応用生命科学科のプレイスメントテスト(生物)、プレイスメントテスト(化学)、プレイスメントテスト(英語)それぞれの順位と、1年後(1年次3月時点)の順位との相関関係に各入試区分を図示した。その結果、いずれの科目においてもプレイスメントテストの順位が20位以内で1年後の成績も20位以内をキープしている学生には総合型選抜での入学生はおらず、推薦、個別、共通テストでの入学生であることが示された。一方総合型選抜での入学生は、プレイスメントテストの順位も、1年後の順位も約20位から約80位まで幅広く分布しており、個人の能力と努力に依存していることが示された。入試区分は1年間での成績順位変動に影響をきたす要因ではなかった。【資料3\_I-1\_(3)-7】

・生命産業ビジネス学科の学生のプレイスメントテスト(英語)それぞれの順位と、1年後(1年次3月時点)の順位との相関関係を図示した。ばらつきが大きく決定係数が低かったが、応用生命科学科同様右肩上がりの傾向を示したことから、プレイスメントテストの順位は、1年後の順位とある程度正に相関した。一方、線形近似曲線における傾きが1を下回り、 $y = x$ の直線と横軸の中央付近、概ね25位のところ

で交差した。このことから、プレースメントテストの順位が概ね 25 位以下であったが、1 年間の学修により順位を上げた学生（グラフ中  $x \geq 25$ ,  $y = x$  の直線の右下の部分）、プレースメントテストの順位が概ね 25 位以上であったが、1 年間の学修により順位を下げた学生（グラフ中  $x \leq 25$ ,  $y = x$  の直線の左上の部分）がある程度の割合存在していた。

- ・プレースメントテストの順位が概ね 30 位以内で 1 年後の成績も 30 位以内をキープしている学生には総合型選抜での入学生はおらず、推薦、個別、共通テストでの入学生であることが示された。生命産業ビジネス学科の総合型選抜での入学生は、応用生命科学科と比較すると、やや成績順位が低い学生の割合が高いことが示された。入試区分は 1 年間での成績順位変動に影響をきたす要因ではなかった。【資料 3\_I-1\_(3)-8】

#### ■ 初年次教育

- ・両学科共通共用必修科目「フレッシュャーズ・セミナー」「早期体験学習」を配置して初年次教育を実施している。2023 年度は COVID-19 の収束に伴い、フレッシュャーズ・セミナーの中の宿泊研修を再開した。4 月 6 日～7 日、新潟県青少年自然の家にて、グループワーク、炊飯などを実施して同期学生同士の友好関係を図った。

### 【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	留年/休学/退学者数
上記の方策	留年/休学/退学者数減少のためには、1 年次における留年/休学/退学者数の減少が最初の重要なポイントである。減少対策を協議し、改善のための具体的な施策（1 年間での成績順位を上げた学生と下げた学生の違いや原因の追究による施策考案、アンケート調査及びプレースメントテスト結果の 1 年次授業への適応、相対評価と絶対評価における学生成績変動把握の有効性の検証、初年次教育内容の検討等）を実施する。
課題 2	入学前教育の実効性
上記の方策	入学前教育は、1 年生が入学時から良好な学びをスタートさせるための重要な機会である。プレースメントテストや 1 年次の成績の解析から入学前教育として扱う内容を協議し、その実施方法を模索する。そして、効果的な入学前教育に向けて改善を行う。

### 【根拠データ、資料】

資料 3_I-1_(3)-1	応用生命科学科の留年・退学状況
資料 3_I-1_(3)-2	生命産業ビジネス学科の留年・退学状況
資料 3_I-1_(3)-3	2023 年度入学者アンケート
資料 3_I-1_(3)-4	2023 年度応用生命科学科プレースメントテスト(化学)
資料 3_I-1_(3)-5	2023 年度応用生命科学科プレースメントテスト(生物)
資料 3_I-1_(3)-6	2023 年度応用生命科学部プレースメントテスト(英語)
資料 3_I-1_(3)-7	2023 年度応用生命科学科入試区分・入試成績と 1 年次成績ならびにプレースメントテスト成績との相関について
資料 3_I-1_(3)-8	2023 年度生命産業ビジネス学科入試区分・入試成績と 1 年次成績ならびにプレースメントテスト成績との相関について

## I-2. 学習成果について

- (1) 教育課程の編成・実施について ≪点検担当：重松委員、教務第一課≫

**【事実(データ)に基づく現状説明】**

<p>■ カリキュラムツリー、マップ、シラバス (DP と各科目の内容との相関性)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラムツリー、カリキュラムマップは履修ガイドに記載しており、年度初めのオリエンテーションにおける修学指導にて学生に周知した。また授業科目ごとに、授業中にシラバスの説明と到達目標について履修学生に説明している。2023 年度は、作成中だったディプロマポリシー (DP) ルーブリックを完成させた。このルーブリックにおける到達度の評価法は、DP と各科目の内容の関連性の理解を企図して DP の各項目のコンピテンス/コンピテンシーと関連性の深い授業科目も記載した内容とした。このルーブリックを用いた DP 到達度の評価は、2024 年度入学生から本格実施する。</li> </ul>
<p>■ 職業的および職業的自立のための教育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 年次の両学科共通共用必修科目として、「早期体験学習」を配置し、本学卒業後のキャリアプランを構築するために必要な基礎知識についての授業を実施している。1 年次後期から 3 年次にかけて、社会連携教育である「キャリア形成実践演習」、2 年次、3 年次では「職業とキャリア形成 1」「職業とキャリア形成 II」をそれぞれ配置して職業観の教育を行っている。</li> </ul>

**【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】**

課題 1	DP ルーブリックの運用と改善
上記の方策	2023 年度に作成した DP ルーブリックを用いた DP 到達度の評価を 2024 年度入学生から本格的に実施する。運用しながら課題を抽出し、改善を行う予定である。
課題 2	新学科設置に向けたカリキュラムの点検・見直し
上記の方策	2027 年度に、新学科 (グリーン・デジタル学科) を新設する計画である。新学科と既存 2 学科のカリキュラムは連動することが予想されていることから点検し見直す。

**【根拠データ、資料】**

	提出無し
--	------

**(2) 学修成果について** 《点検担当：重松委員、教務第一課》

**【事実(データ)に基づく現状説明】**

<p>■ 到達度試験実施による学習成果の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年次進行に伴う学習成果把握のため、履修科目の定期試験とは別に、応用生命科学科の 2 年次学生には化学、生物の 2 科目で、生命産業創造学科の 2 年次、3 年次学生には英語の 1 科目で到達度試験を実施しており、その学修成果を分析した。</li> <li>2023 年度の化学の平均得点率は 44% であり、2022 年度の 48% よりも低い値となった。2022 年度から 2023 年度にかけて問題の若干の改訂を行ったため、両者を正確に比較することは難しいが、ほぼ同等の難易度と考えている。ヒストグラムでは、最大の得点率が 40~49% に分布していることは、2022 年度 2023 年度で共通しているが、2023 年度は 2022 年度に比べて 50~59% の得点率の割合が減少し、低得点率側にすそ野が広がっていた。出題分野による得点率からは、2022 年度と同様に「酸と塩基」、「化学結合」、「アルケンの反応」、「立体化学」を苦手にする学生が多かった。【資料 3_I-2_(2)-1】</li> </ul>
---

- ・2023年度の生物の平均得点率は50%であり、2022年度の52%よりも若干低い値となった。2022年度から2023年度にかけて問題の若干の改訂を行ったため、両者を正確に比較することは難しいが、ほぼ同等の難易度と考えている。ヒストグラムでは、最大の得点率が50～59%に分布していることは、2022年度2023年度で共通しているが、2023年度は2022年度に比べてこの50～59%の得点率の割合が減少し、70%以上の得点率の割合も減少していた。出題分野による得点率からは、2022年度と同様に「タンパク質の構造」、「クリステ」、「減数分裂」、「基質酵素反応速度」、「形質」、「遺伝子型」を苦手にする学生が多かった。【資料3\_I-2\_(2)-2】

- ・生命産業ビジネス学科（英語）については学生数が少ないこともあり、年度による比較、評価が難しいが、2023年度の2年次は2022年度に比べて若干平均値が上昇し、2023年度の3年次は2022年度に比べて若干平均値が低下した。2022年度同様であるが、2年次、3年次とも難易度が準2級レベルの問題でも正答率が低い問題が少なからずあった。【資料3\_I-2\_(2)-3】

■ 学修期ごとの学習成果達成度、学位授与方針明示した学生の学習成果の把握(DPループブリック)

- ・2024年3月に、2023年度4年生に対してDPループブリックを用いたディプロマポリシーの到達度を評価した。DPループブリックは2023年度に改訂作業を行っており、今回は改訂前のDPループブリックを使用して、各研究室の指導教員が面談形式にて実施した。両学科の学生とも、全てのDP項目について、教員の客観的評価と比較して学生の自己評価が低かった。【資料3\_I-2\_(2)-4】【資料3\_I-2\_(2)-5】

■ 卒業状況

- ・2023年3月に卒業した2019年度入学生について、応用生命科学科では、入学者95名が2022年度4年次において83名となり、81名が卒業した。4年次学生の卒業率は97.59%であり、4年間で卒業できた学生の割合は85.26%であった。生命産業創造学科では、入学者27名が2022年度4年次において22名となり、22名が卒業した。4年次学生の卒業率は100%であり、4年間で卒業できた学生の割合は81.48%であった。

■ 授業改善に向けた授業評価アンケート

- ・2022年度前期・後期、2023年度前期・後期に開講した各科目の授業評価アンケートの総合評価の平均点を、学年ごとにグラフに示した。両学科とも、全ての学期・学年において5点満点で4.0点以上の評価であり、全体的に学生の授業に対する満足度は高い。ただし、応用生命科学科では学年によらず、2022年前期が比較的低い値であり、生命産業ビジネス学科では、年度によらず、3年次科目において比較的低い値であった。【資料3\_I-2\_(2)-6】

■ 授業改善に向けた卒業時アンケート

- ・2023年度4年生に対して、例年通り卒業時アンケートを実施した。総括的な設問として、応用生命科学部での学びの満足度(5段階)に対する回答を集計したところ、応用生命科学科では「ある程度満足」が48.8%、「非常に満足」が37.5%であり、86.3%が満足している回答であった。
- ・生命産業創造(ビジネス)学科では「ある程度満足」が60.7%、「非常に満足」が21.4%であり、82.1%が満足している回答であった。
- ・これらの結果は例年通りの傾向であり、本学部での学修に対する学生の満足度は良好である。【資料3\_I-2\_(2)-7】

■ カリキュラム改善に向けた卒業生アンケート、就職先アンケート

<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023年度は、2021年度の卒業生にアンケートを実施した。その中で、新潟薬科大学の教育や経験を通して習得したもののうち、卒業後、役に立ったと感じるものという設問に対して、応用生命科学科、生命産業創造（ビジネス）学科の2021年度の卒業生の回答で最も多かったのが、「当該分野における基礎的知識・技能」（応用生命科学科 58.3%、生命産業創造学科 66.7%）であった。</li> <li>・応用生命科学科卒業生では、「当該分野における専門的知識・技能」25.0%、「自己管理能力」25.0%、「周囲（他者）へ配慮する力」25.0%も回答が多い項目であった。</li> <li>・生命産業創造（ビジネス）学科卒業生では、「周囲（他者）へ配慮する力」66.7%、「倫理観」50.0%も回答が多い項目であった。全体としては例年通りの傾向が示された。</li> <li>・2023年度は、2022年度卒業生の就職先および過去5年間で2名以上就職した企業を対象にアンケート調査を実施した。</li> <li>・「応用生命科学部の卒業生が優れていると思うもの」に対する回答では、「他社と協働して働く力」が最も多く59.5%であった。次いで、「大学での専門的知識」31.6%、「他者を理解する力」30.4%、「行動持続力」29.1%が比較的多い回答であった。</li> <li>・「応用生命科学部の卒業生に物足りなさを感じるもの」に対する回答では、「リーダー性」62.0%、「自信をもって行動する力」30.4%が比較的多い回答であった。</li> <li>・『数理・データサイエンス・AI教育プログラム』に関連して「今後、就職する学生に期待する能力（知識）」の質問に対して、「Word、Excel、PowerPointの基本的なPC能力」70%、「データ解析結果（グラフ・表など）を正しく読む能力」69.6%、「情報セキュリティの知識」48.1%が比較的多い回答であった。</li> </ul> <p>■ 教員免許取得状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2023年度卒業生の教員採用試験の合格状況は以下の通りである。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校教諭二種免許状の取得者数3名。</li> <li>・中学校教諭一種免許状（理科）の取得者数16名。</li> <li>・高等学校教諭一種免許状（理科）17名。</li> </ul> </li> <li>・中学校教諭一種免許状、高等学校教諭一種免許状に加えて、2019年度以来になる小学校教諭二種免許状取得者が3名あった。【資料 3_I-2_(2)-8】</li> </ul>
--

**【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】**

課題1	留年/退学者数
上記の方策	1年次における留年/退学の課題に対する対策案は「I-1_(3) 新入学生の状況について」記載した。留年/退学者数の低下は4年間卒業率の向上に繋がる大事な要因である。各学年の留年/退学者数の低下へ向け、具体的には、これまでの各授業の内容、単位取得状況等の調査による各学科のカリキュラム点検を行い、特に1年次2年次の授業科目について改善を行う。
課題2	ディプロマポリシー（DP）への意識と評価
上記の方策	4年次の最後に実施しているDPルーブリック評価において、全てのDP項目で教員の客観的評価と学生の自己評価に大きなギャップが生じている。このことについて協議を行い、改善のための具体的な施策（2023年度作成DPルーブリックで、学修期ごとの段階的なDP到達度の評価、オリエンテーション等を活用してDPへの意識を高める等）を実施する。
課題3	授業改善
上記の方策	授業評価アンケートで寄せられた授業に関する意見、到達度試験で明らかになった学生の苦手領域、卒業生アンケート及び就職先アンケートで明らかになった必要・期待される能力を考慮しながら協議し、カリキュラム案の作成、授業実施方針の検討を行う。

**【根拠データ、資料】**

資料 3_I-2_(2)-1	2023 年度応用生命科学科到達度試験(化学)
資料 3_I-2_(2)-2	2023 年度応用生命科学科到達度試験(生物)
資料 3_I-2_(2)-3	2023 年度生命産業ビジネス学科到達度試験(英語)
資料 3_I-2_(2)-4	2023 年度応用生命科学科 DP ルーブリック評価
資料 3_I-2_(2)-5	2023 年度生命産業創造学科 DP ルーブリック評価
資料 3_I-2_(2)-6	2023 年度授業評価平均点
資料 3_I-2_(2)-7	2023 年度卒業時アンケート
資料 3_I-2_(2)-8	2023 年度卒業生の免許取得状況

(3) 授業運営について 《点検担当：重松委員、教務第一課》

【事実(データ)に基づく現状説明】

<p>■ 出席状況の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2023 年度において、応用生命科学科 1 年次前期 3 科目、後期 2 科目、2 年次前期 2 科目、後期 1 科目、生命産業ビジネス学科 1 年次前期 3 科目、後期 2 科目、2 年次前期 2 科目、後期 1 科目について出席状況の把握を行い、3 回欠席した学生にはアドバイザーに当該学生との面談を実施してもらおうシステムを運用した。【資料 3_I-2_(3)-1】【資料 3_I-2_(3)-2】</li> <li>・応用生命科学科前期科目については、1 年次 7 名、2 年次 17 名に対する面談を通じて注意を喚起した。応用生命科学科後期科目については 1 年次 13 名に対する面談を通じて注意を喚起した (2 年次は未集計)。</li> <li>・生命産業ビジネス学科前期科目については、1 年次 5 名、2 年次 3 名に対する面談を通じて注意を喚起した。生命産業ビジネス学科後期については、1 年次 7 名に対する面談を通じて注意を喚起した (2 年次は未集計)。</li> <li>・2023 年度後期から、各講義室に設置した学生証リーダーを用いた出席管理システムが導入された。新システムの活用の仕方ならびに、上に記載した従前のシステムの在り方を検討する必要がある。</li> </ul> <p>■ 授業評価アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3_I-2_(2)の項目で記載した通り、各科目の授業評価アンケートの総合評価の平均点の結果から、両学科とも、全体的に学生の授業に対する満足度は高いことが示された。従って、特に問題なく授業を運営できたものと考えている。</li> </ul>
---

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	出欠管理システムの活用
上記の方策	出欠管理システムによる遅刻及び欠席者の把握と面談は、留年/退学者数の減少に貢献できる。これまで応用生命科学部では、1, 2 年生の必修科目を調査対象科目として、独自の出席管理を行い、回数の多い学生とは面談を行ってきた。2023 年度後期に新しい出欠管理システムが大学全体に導入されたことから、これまでの出席管理機能と新規システムの出席管理機能を比較しながら、効果的な学生への注意喚起の在り方について検討する。

【根拠データ、資料】

資料 3_I-2_(3)-1	2023 年度前期モニタリング科目
資料 3_I-2_(3)-2	2023 年度後期モニタリング科目



### I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について（学部、研究科共通）

#### (1) 学生修学・生活支援について 《点検担当：木村委員、学生支援課》

##### 【事実(データ)に基づく現状説明】

###### ・留年/休学/退学状況【資料 3\_I-3\_(1)-1】

###### 留年状況

応用生命科学科の全体の留年率は 5.5%であり、2022 年度の全体の留年率と同じであったが、その内訳は 1～2 年生の留年率が低下し、3 年生以上が上昇した。

生命産業ビジネス学科の全体の留年率は 4.6%であり、2022 年度の全体の留年率の 7.1%から低下した。特に 1 年次の留年率が減少（11.5%→7.4%）した。

###### 休学状況

応用生命科学科の全体の休学率は 1.6%であり、2022 年度の全体の休学率と同じであったが、その内訳は、1～2 年生の休学率が増加し、3 年生以上が減少していた。

生命産業ビジネス学科の全体の休学率は 0.7%であり、2022 年度の全体の休学率は 2.4%で上昇した。2 年次の休学率は上昇したが、1 年次の休学率が減少していた。

###### 退学状況

応用生命科学科の全体の退学率は 2.5%であり、2022 年度の全体の退学率が 3.9%であった。1 年次の退学率が大きく減少していたが、2 年次の退学率が昨年度 4.8%から 5.8%に上がっている。

生命産業ビジネス学科の全体の退学率は 2.0%であり、2022 年度の全体の退学率が 3.1%であった。1 年次及び 3 年次の退学率が大きく減少していたが、4 年次の退学率が昨年度 0%から 3.1%と上がっている。

###### ・修学支援状況

ドロップアウト防止につなげることを目的として、1 年生を対象に【資料 3\_I-3\_(1)-2】に基づき、前期成績が振るわなかった学生へ学生委員とアドバイザーの 2 名で面談を行い、学生の状況把握と修学指導等を行うシステムがあるが、基準に該当する対象者はいなかった。

###### ・学生活動、クラブ活動支援状況

新型コロナウイルス感染症の影響により、自粛してきたアドバイザー活動費を再開した。これは、学生と担当教員との親睦を深め、より円滑な学生生活を送れるよう支援する制度であるが、両学科とも特に 2 年生の参加率が低かった。【資料 3\_I-3\_(1)-3】

4 月に学生から電子掲示板の確認方法などの問い合わせが、事務室に複数あることを受け、全学組織である IT 委員会と連携し、新入生オリエンテーション時に ICT 利用セットアップの時間を新たに設け、少しでも早く学生が大学生活に慣れることができるよう支援した。【資料 3\_I-3\_(1)-4】

学生支援総合センターと連携して、本学学友会（学生自治組織）が主催する新入生歓迎会、及び学園祭（対面式）を支援した。新入生歓迎会では、秋葉区及び新津商工会議所からの支援もあり学ランマップ加盟店で使用できる 2,000 円券を配布し、学生同士が仲良くなるきっかけ作りとして支援した。【資料 3\_I-3\_(1)-5】

また、他学部の学生委員会と連携し、新型コロナウイルス感染症の影響で中止をしていたスキー&スノーボードスクールを再開した。【資料 3\_I-3\_(1)-6】

###### ・特待生・奨学金について

2023 年度の応用生命科学部特待生（応用生命科学科上位 10 名、生命産業創造学科

上位 5 名) を選考した。全学部統一の学業成績優秀者奨学金規程実施のため、この特待生規程は、2023 年度をもって廃止となる。

入学試験による特待生継続審査を行い「継続取消者なし」として決定した。特別指定校による学費減免審査については、継続取消になった者が応用生命科学科 5 名、生命産業創造学科 2 名となった。【資料 3\_I-3\_(1)-7】

災害の影響や失職等により家計が急変した学生へ授業料減免審査を行い、前期は応用生命科学科 1 名、生命産業ビジネス学科 1 名、後期は応用生命科学科 3 名の授業料を半額減免した。

### 【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	応用生命科学科の退学率
上記の方策	文部科学省令和 5 年度の中途退学者・休学者数の調査結果では、大学の退学率は平均 2.1% である。応用生命科学科では 2.5%、生命産業ビジネス学科では 2% で、応用生命科学科は平均を超えていた。退学率低下へ向けた協議を行い、具体的な施策（アドバイザー活動の参加率向上、授業出席率等の調査を活用した積極的な学生面談等）を実施する。
課題 2	学生活動支援について
上記の方策	2023 年度にアドバイザー活動費を利活用していない教員が少数いた。退学/休学/留年に対する抑制策の 1 つとして、活動費を利用した活動の実施を促す。

### 【根拠データ、資料】

資料 3_I-3_(1)-1	応用生命科学部退学休学留年率
資料 3_I-3_(1)-2	2022 年面談基準
資料 3_I-3_(1)-3	アドバイザー活動状況
資料 3_I-3_(1)-4	オリエンテーションスケジュール
資料 3_I-3_(1)-5	学ランマップ 2,000 円チケット実施結果
資料 3_I-3_(1)-6	スキースノーボードスクール参加者数
資料 3_I-3_(1)-7	特待生採用者数及び廃止者数一覧

### (2) キャリア支援について 《点検担当：杉田委員、キャリア支援課》

#### 【事実(データ)に基づく現状説明】

キャリア支援については、民間企業の採用選考時期の早期化に対応するため、就職活動を早期から意識させるために、1 年次「早期体験学習」を皮切りに体系的に実施した。また、夏のインターンシップ（オープンカンパニー等を含む）の重要性が増していることから、3 年次のキャリアガイダンスの計画を見直しグループワーク演習を追加するなど強化した。【資料 3\_I-3\_(2)-1、資料 3\_I-3\_(2)-2、資料 3\_I-3\_(2)-3】

また、学内企業合同説明会については、業界業種を拡大し前年度比 10% 増の 101 社の企業に参加していただき実施した。(資料 3\_I-3\_(2)-4)

就職率（就職希望者数に対する就職者数の割合）および進学については、引き続き 100% を達成することができた。(資料 3\_I-3\_(2)-5)

### 【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	業界・業種の幅広い知識の獲得
上記の方策	学生に業界・業種の幅広い知識の獲得させるため、学内合同企業説明会等の参加企業を再検討、キャリアガイダンス内での新規講義の設置を実施す



	る。
課題 2	学外への発信力の強化
上記の方策	学外への発信力を強化するため、ホームページの更新、およびオープンキャンパスでの紹介を実施する。

【根拠データ、資料】

資料 3_I-3_(2)-1	キャリア教育
資料 3_I-3_(2)-2	ガイダンス実施実績（1 年生対象）
資料 3_I-3_(2)-3	ガイダンス実施実績
資料 3_I-3_(2)-4	ガイダンス実施実績（学内合同企業説明会）
資料 3_I-3_(2)-5	就職/進学状況

I-4. AP、CP、DP、3 方針の整合性について ≪点検担当：高久委員長、重松委員、教務第一課、小瀬委員、入試課≫

【事実(データ)に基づく現状説明】

<p>・2023 年度応用生命科学科及び生命産業創造学科卒業生の学修達成度を DP ルーブリック表で評価を実施した（実施率 100%、DP ルーブリック表は「レベル 1：かなり努力を要する」、「レベル 2：努力を要する」、「レベル 3：満たしている」、「レベル 4：十分満たしている」の 4 段階尺度）。教員の客観的評価はそれぞれレベル 3、レベル 3.19 であり、CP に沿った教育が十分に達成できていると判断できる。【資料 3_I-4-1】【資料 3_I-4-2】</p> <p>・2024 年度入試から、学校推薦型選抜（一般公募・高大連携）において、筆記試験を課題提出に変更した。また 2025 年度入試から、学校推薦型（指定校制）においては課題提出が廃止される。これらの変更点により【資料 3_I-4-3】に示すように専願入試選抜者の学力評価（特に「知識・技能」）の調査書（学習成績の状況）に対する依存度が高まる。特にこの点について、AP に即って受け入れが行われ、CP に即した教育課程に適應できる学力を有した志願者を選抜できているかを評価するために、専願入試における 20 年度入学者から 23 年度入学者までのデータを用いて、各学年における成績順位に対する入試順位もしくは学習成績の状況の間で相関分析を行った。結果、入試順位は応用生命科学科では 1～2 年次成績順位との間に相関がみられ、生命産業ビジネス学科においては 1 年次成績との間に相関がみられた。一方、学習成績の状況は応用生命科学科では 1～4 年次成績順位との間に相関がみられ、生命産業ビジネス学科においては 1～3 年次成績との間に相関がみられ、全体に入試順位よりも良い相関が得られた。これは、入試順位は面接などを通じて、純粋な学力のみならずコミュニケーション力などを包括的に評価した結果に基づいているためと考えられる。学力の 3 要素のうち特に成績に直接反映されやすい「知識・技能」の評価に関しては 2024 年度以降の専願入試で行われる学習成績の状況に基づく評価が十分な妥当性を有すると判断された。</p> <p>上述のとおり、妥当性のある入試、適切な教育課程の編成がされ、学修成果も適切に測れており、3 方針の整合性は取れている。</p> <p>しかしながら、DP ルーブリック評価における教員評価と学生評価のギャップ（応用生命科学科：教員評価レベル 3 と学生評価レベル 2.55、生命産業創造学科：教員評価レベル 3.19 と学生評価レベル 2.46）が示されており、課題として残る。【資料 3_I-4-1】【資料 3_I-4-2】</p>
---

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題1	応用生命科学科における教員と学生の評価ギャップ
上記の方策	学生の自己評価と教員の客観的評価のギャップ解消へ向けた協議を行い、改善に向けた具体的な施策（特に評価のギャップが大きかった「論理的思考とプレゼンテーション」について、授業及び研究室指導時にDPと事例の関連性について学生への認識を深めるなど）を示し、実行する。
課題2	生命産業創造学科における教員と学生の評価のギャップ
上記の方策	学生の自己評価と教員の客観的評価のギャップ解消へ向けた協議を行い、改善に向けた具体的な施策（特に評価のギャップが大きかった「地域貢献」「情報の収集・分析・判断・活用」について、授業及び研究室指導時にDPと事例の関連性について学生への認識を深めるなど）を示し、実行する。

【根拠データ、資料】 ※赤字は学外非公表

資料 3_I-4-1	2023 年度応用生命科学科卒業生 DP ルーブリック評価
資料 3_I-4-2	2023 年度生命産業創造学科卒業生 DP ルーブリック評価
資料 3_I-4-3	AP および入試成績と成績順位の相関関係

II. 研究活動について（学部、研究科共通） 〈点検担当：高久委員長、基盤整備課〉

【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・「研究実績」は、前年度と比較して、学術論文発表数は低下したが、学会発表件数が大きく向上し、コロナ禍前の発表数に近くなった。【資料 3_II-1】</li> <li>・「外部資金獲得状況」は、前年度と比較して、56 件と件数は増加したが、獲得金額（委託研究費）が減少した。【資料 3_II-2】</li> </ul>
---

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題1	学術論文発表数の低下
上記の方策	学術論文数増加に向けた協議を行い、改善に向けた具体的な施策（学会発表数は増加しているため、その成果を論文に繋げる施策など）を示し、実行する。
課題2	委託研究費の低下
上記の方策	委託研究費を大きく占めるのは、科研費などの競争的資金である。競争的資金の獲得に向けた協議を行い、改善に向けた具体的な施策（競争的資金への応募数増加、獲得増加など）を示し、実行する。

【根拠データ、資料】

資料 3_II-1	2023 年度 応用生命科学部 研究業績
資料 3_II-2	2023 年度 応用生命科学部 外部資金獲得状況

III. 社会連携・社会貢献活動について（学部、研究科共通）

### Ⅲ-1. 国際交流について <<点検担当：高久委員長、学事課>>

#### 【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・モンゴル 3 校、タイ 1 校の 4 校が 2023 年度新たに海外協定校となり、海外協定校は合計 15 校となった。【資料 3_Ⅲ-1-1】また、2021 年度に協定校となったマニラ・セントラル大学と井口准教授が前年度に引き続き、共同研究を推進している。</li> <li>・コロナの影響で実施できていなかった学生海外派遣事業を再開し、西シドニー大学への短期語学研修（薬学部 1 名、応用生命科学部生 4 名、医療技術学部生 1 名、看護学部生 4 名）を実施した。【資料 3_Ⅲ-1-2】また、日本との相互理解の増進と友好関係の強化を目的とした吉林省青年訪中企画に応用生命科学部学生 3 名が参加した。</li> </ul>
--

#### 【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	海外協定校からの留学生受入
上記の方策	モンゴル 3 校との包括連携協定の主な目的は留学生受入であった。留学生獲得、受入に向けた協議（入学済み留学生の入試、学生生活、授業、就職における検証と課題抽出）を行い、具体的な施策（留学の魅力、入試、学生生活、授業、就職など）を示し、実行する。

#### 【根拠データ、資料】

資料 3_Ⅲ-1-1	2023 年度海外協定校一覧
資料 3_Ⅲ-1-2	2023 年度学生海外派遣事業参加実績

### Ⅲ-2. 高大連携について <<点検担当：新井委員、教務第一課>>

#### 【事実(データ)に基づく現状説明】

<p>■ 高大連携講座について</p> <p>応用生命学科の内容で運営されている、2023 年度の「応用生命科学講座」は申込者数 16 名（県外 1 名）、修了証（高大連携講座推薦の出願資格）を 8 名に授与した。そのうち 13 名が 2024 年度入試を受験して本学部に入學した。生命産業ビジネス学科の内容で運営されている、2023 年度の「生命産業ビジネス講座」は申込者数 19 名（県外 1 名）、修了証を 11 名に授与した。そのうち 13 名が 2024 年度入試を受験して本学部に入學した。</p> <p>2022 年度と比較して受講者は減少したがその中の本学への入学者数が増加した。</p> <p>【資料 3_Ⅲ-2-1】</p> <p>2023 年度は新たに数名の教員に動画の作成を依頼し公開した。</p> <p>■ 研究系部活動支援事業について</p> <p>2023 年度の研究系部活動支援事業は、14 の学校から 15 件（県内 8 件、県外 7 件）の申請があり、申請内容の審議の結果、すべてを採択した。新規採択校は 2 校であった。申請数は、2021 年度 15 校 16 件、2022 年度の 14 校 14 件でありここ数年は、15 件前後となっている。主として理系の内容であり、商品開発など社会科学系の申請がほとんどない。</p> <p>2023 年度の研究成果報告会は、2022 年度に引き続き対面式（県外校は原則 ZOOM 使用）の口頭発表で実施した。県外校を原則オンライン形式としたため参加者が多数になった。ZOOM を用いた発表、質疑応答もスムーズに進行した。2023 年度の参加者数は、</p>
--

対面形式 9 校 75 名、オンライン形式 4 校 27 名であった。また、本年度よりコロナ禍以降初めて交流会を実施した。対面式参加の県外校 1 校は参加できなかったが、それ以外の対面式参加の高校は参加し、参加者（部員・顧問）と大学教員との交流を行い、高校における探究型学習が抱える課題（授業時間、実施体制、経費等）の情報が得られた。【資料 3\_III-2-2】

■その他

2023 年度下半期に、「高等学校の総合的探求の時間」の支援のため、本学部で支援できるテーマを提案するために、まず応用生命科学部の教員に支援できるテーマについてアンケートをとった。それをまとめた後、2024 年度の連携に向けて近隣高等学校の校長及び担当教員と協議を行った。その際、本学部で用意した「総合的探求の時間」用の探求テーマ集を提示し意見を徴収した。また、これについて高等学校で生徒に提示することにもなった。具体的な支援の方法については、2024 年度に包括連携を含めて、継続的に審議することになった。

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	「応用生命科学講座」及び「生命産業ビジネス講座」の参加者総数
上記の方策	「応用生命科学講座」及び「生命産業ビジネス講座」は、生命科学の楽しさとともに各学科の学びの内容をわかりやすく伝えるための講座である。本講座への参加者数を増やすため、2023 年度に新たに数名の教員が作成した動画を追加した本講座を高校訪問、HP での周知時期を前年度より早くする。
課題 2	研究系部活動支援事業における社会科学系提案
上記の方策	研究系部活動支援事業の提案内容は、主として理系の内容であり、商品開発など社会科学系の申請がほとんどない。社会科学系の申請増加は、本学の生命産業ビジネス学科（文系）の認知の大事な因子となる。社会科学系の申請増加へ向け、ビジネスに関する活動を実施している商業高校などを中心に本支援事業の周知を行う。

【根拠データ、資料】

資料 3_III-2-1	申込者、修了証授与者、入学者数
資料 3_III-2-2	新潟県内及び新潟県外の申請件数および採択件数

III-3. 地域連携について <<点検担当：伊藤委員、学事課>>

【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携活動については、新潟市秋葉区、新津商工会議所及び南蒲原郡田上町（いずれも本学と包括連携協定を締結）との取組みを中心に活動を行った。【資料 3_III-3-1】地元自治体（秋葉区・田上町）、産業界（新津商工会議所）との連携はコロナ禍前と同程度の取組みとなった。特に、田上町・町政 50 周年記念事業への協力や、秋葉区との「キャリア形成実践演習」等の教育連携により、本学学生が幅の広い世代間交流を実施した。</li> <li>・市民向けの公開講座である「医療・健康講座」を 6 回開講した。2023 年度から 4 学部へ移行したことを期に、医療・健康系総合大学として、各学部の教員が講師を務める形で実施した。内 2 回は、田上町及び新津商工会議所との連携事業として、よりテーマを絞った講座として開催した。</li> </ul>
---

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	地域連携の取組みの活性化
上記の方策	本学学生・教職員が地域社会に溶け込み、「実学一体」の地域連携による教育活動の実現のため、各種連携活動をコロナ禍前の水準まで戻す。
課題 2	「医療・健康講座」をはじめとする市民向け公開講座の拡充
上記の方策	高等教育機関としての知見を地域住民の方が気軽に学べ、興味を抱く事業とするために、社会情勢や最新環境に合わせ、各世代に役立つ講座となるように公開講座内容の協議などを実施する。

【根拠データ、資料】

資料 3_Ⅲ-3-1	2023 年度の主な地域連携活動一覧
------------	--------------------

IV. 教員・教員組織について

IV-1. 教員組織について <<点検担当：高久委員長、学事課>>

【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・応用生命科学部の教員数は、学生収容定員 720 名に対する大学設置基準上の必要教員数を満たし、本学部の教育研究方針を実践するための必要な教員数で構成している。 【資料 3_IV-1-1】</li> <li>・応用生命科学部の教員年齢構成は、50 代教員の割合が 1 番大きく、20、30 代若手教員の割合が非常に少なく、40 代以上の教員の割合が全体の約 9 割を占める。また、20 代教員 1 名及び 70 代教員 2 名は特任教員である。また、応用生命科学部の女性教員の割合は、17.2% (29 名中 5 名) で、内閣府の男女共同参画白書令和 6 年版 (<a href="https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r06/zentai/pdf/r06_07.pdf">https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r06/zentai/pdf/r06_07.pdf</a>) 第 10 分野に示されている大学・大学院の教員総数に占める女性の割合 27.2%の 2/3 程度であった。ただし、5 名のうち 2 名に関しては特任教員である。【資料 3_IV-1-2】学生とのコミュニケーション、多様な視点、教育の継続性等から若手教員の必要性、女子学生が 1/3 を占める応用生命科学部の女性教員の必要性が考えられる。</li> <li>・教育上主要と認められる授業科目である必修科目における専任教員による担当 比率は、応用生命科学科 98.4%、生命産業創造学科 89.3%であるが、教養必修科目を除く専門必修科目に限れば両学科とも 100%である (2023 年度開講科目)。また、助教以上の専任教員で博士号を有するものは、応用生命科学科で 20 名中 18 名、生命産業ビジネス学科では 8 名中 8 名であり、専任教員は優れた専門知識を有し、本学部の目的に沿った教育研究成果を期待できる十分な教員組織を編制している。</li> <li>・応用生命科学部の 2023 年度の平均授業担当時間数は 250 時間であった。300 時間を超える教員が 31 名中 11 名おり、うち 1 名は 400 時間を超えている。【資料 3_IV-1-3】全体的に授業担当時間数が多いが、若手教員の研究活動を奨励する観点から、若手教員授業担当時間数の軽減、研究室配属学生指導数の軽減をするように努めている。</li> </ul>
---

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	若手教員及び女性教員割合
上記の方策	若手教員及び女性教員割合の増加に向けた協議を行い、改善に向けた具体的な施策 (若手教員、女性教員の積極的な採用など) を示し、実行する。
課題 2	教員の授業負担



上記の方策	全体的に授業担当時間数が多いことから、現状の教員数に沿ったカリキュラムの再構築、各教員の授業担当時間数の平準化に向けた方策を講じるための協議を継続し、実行する。
-------	--

【根拠データ、資料】

資料 3_IV-1-1	設置基準上必要専任教員数【学士課程】
資料 3_IV-1-2	教員の年齢構成表
資料 3_IV-1-3	教員別授業担当時間数

IV-2. FD 活動について（学部、研究科共通） ≪点検担当：高久委員長、教務第一課≫

【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023 年度の応用生命科学部 FD 研修は 2 回実施した。1 回目(8/21 開催)は 90.3% (前年度 83.3%)、2 回目(3/15 開催)は 48.4% (前年度 76.7%)、平均 69.4% (前年度 80%) の参加率であった。2022 年度同様、ディプロマ・ルーブリックに関するテーマを設定した研修が 8 割を超える参加率となり、関心度の高いテーマだったことが伺える。【資料 3_IV-2-2】</li> </ul>
--

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	FD 研修会への参加率
上記の方策	次年度はより早い時期から計画、周知を行い、研修テーマも教員にヒアリングを行うなどニーズを確認しながら、教員にとってより関心の高いものを設定する。

【根拠データ、資料】

資料 3_IV-2-1	2022 年度 FD 研修会一覧
資料 3_IV-2-2	2023 年度 FD 研修会一覧

V. 定員・学費の適切性について ≪点検担当：高久委員長、学事課≫

【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023 年度の応用生命科学部の収容定員充足率は 73.5% (応用生命科学科 76%、生命産業創造学科/生命産業ビジネス学科 68%) であった。【資料 3_V-1】</li> <li>・2024 年度入試における応用生命科学科の入学定員充足率は 65%であり、2023 年度入試の 67%よりも減少した。生命産業ビジネス学科の入学定員充足率は 120%であり、生命産業創造学科から生命産業ビジネス学科への学科名称変更後、継続して定員を満たしている。【資料 3_V-2】</li> <li>・旺文社教育情報センター調査による「2023 年度大学の学費平均額」によると、応用生命科学科と同系統の農・獣医畜産・水産学部系統/農芸化学では、入学金 244,348 円、授業料 1,010,609 円、初年度納入金 1,626,376 円であり、応用生命科学科の学費は全国平均とほぼ同等で適切であると判断される。【資料 3_V-3】</li> <li>・生命産業創造学科/生命産業ビジネス学科と同系統の農・獣医畜産・水産学部系統/</li> </ul>
---

農業経済学では入学金 255,333 円、授業料 873,933 円、初年度納入金 1,450,593 円、経済・経営・商学部/経営学・経営情報学・商学・会計学では入学金 218,237 円、授業料 798,251 円、初年度納入金 1,297,516 円であった。生命産業創造学科/生命産業ビジネス学科の学費は、経済・経営・商学部/経営学・経営情報学・商学・会計学の平均学費とほぼ同等で適切であると判断される。【資料 3\_V-3】

**【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】**

課題 1	応用生命科学科における定員の適切性
上記の方策	定員充足へ向けた施策を考慮した上で、入学定員の適切性の協議を行い、実行する。
課題 2	入学金、授業料、初年度納入金の適切性
上記の方策	全国の大学の授業料等の状況を考慮した適切な学費設定の協議を実施する。

**【根拠データ、資料】**

資料 3_V-1	応用生命科学部 収容定員充足率
資料 3_V-2	応用生命科学部 入学定員充足率
資料 3_V-3	応用生命科学部 学費

#### 4. 大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価

##### I. 教育活動について

##### I-1. 学生の受入れについて 《点検担当：中村委員、入試課》

###### 【事実(データ)に基づく現状説明】

<p>・2024年度の入学者として、博士前期課程は8名の入学生を受け入れた。博士後期課程において入学者はいなかった。全国的に大学院進学率、特に博士後期課程への進学率が減少傾向にある中、本大学院でも博士後期課程は入学定員が未充足の状況が続いている。2023年度の入学者は、博士前期課程6名、博士後期課程1名であり、前期課程と後期課程ともに入学定員を充足することができなかったが、2024年度は、前期課程のみ入学定員を充足することができた。</p> <p>・志願者、入学者増加を目指し、2024年度一般入試第2期から外国語（英語）を外国語（専門英語）に変更、筆記試験（化学または生物学と専門科目）又は口述試験の選択にした。その結果、一般第2期で6名の受験者のうち、5名が新規の口述試験を選択した。</p>
--

###### 【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題1	博士後期課程の入学定員が未充足
上記の方策	博士前期課程への進学者も減少の傾向にあるので、定員充足のために協議を行い、具体的な施策（大学院進学メリットを示した学内進学者の促進、留学生、社会人受入の推進等）を実施する。
課題2	入学者選抜（口述試験）の効果検証
上記の方策	2024年度一般入試2期から実施した口述試験合格者の能力を調査するなどし、口述試験による評価の検証を実施する。

###### 【根拠データ、資料】

資料4_I-1-1	大学院入試結果
-----------	---------

##### I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について 《点検担当：重松委員、教務第一課》

###### 【事実(データ)に基づく現状説明】

<p>■ 授業担当教員(授業担当負担)</p> <p>・大学院応用生命科学研究科の担当教員18名の年間総時間は、0時間から24時間まで分布していた。教員の授業負担と大学院生の人数を考慮し、大学院の講義科目（博士前期の特論、博士後期の特殊講義とも）隔年開講で実施した。</p> <p>■ 修了状況</p> <p>・2023年度修了生は博士前期課程で8名中全員が修了して就職し、1名が退学した。</p> <p>■ 研究指導</p> <p>・2023年度は、2021年度入学生から実施した、ディプロマポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)の改定に伴う授業カリキュラムの改定の3年目となる。研究指導計画の大学ホームページで公開すると共に、各年度初めに指導教員と学生とが面談しながら研究指導計画書を作成・研究計画を可視化する取り組みを全員に実施した。</p> <p>■ 初年次教育</p> <p>・大学院入学初年度の学生を対象に大学院で研究することの目的を講義する科目とし</p>
--



て、2021年度から博士前期課程に「研究リテラシーⅠ」、博士後期課程に「研究リテラシーⅡ」を開講している。

- カリキュラムマップ、シラバス(DPと各科目の内容との相関性)
  - ・DPと各授業科目の内容の関連を示すカリキュラムマップを作成し学生に提示している。
  - ・2023年度修了生に対して、従来のDPルーブリックを用いて指導教員と学生の面談によりDPの到達度の評価を全員に実施した。
  - ・2023年度に研究室体制の改正を実施したことにより、2024年度博士前期課程入学生から開講する特論の追加による学生の科目選択の拡大と開講時期の調整を実施した。
- 成績評価
  - ・2023年度、2022年度の各科目の成績評価を確認した。すべての科目について、評価点の平均が82点から94点の間に分布しており、科目間の評価の顕著な差がみられなかった。学生の履修科目による公平性が保たれている。

**【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】**

課題1	研究リテラシー1およびⅡの効果検証
上記の方策	研究リテラシー1およびⅡの効果を、授業評価アンケート等を活用して検証する。
課題2	DPルーブリック表の改定
上記の方策	DPの各項目の到達度を評価するためのDPルーブリック表について、アセスメント・ポリシーに示されている指標を活用した質的・量的な解析の提示に至っていない点を改善する作業を進め、2024年度に完成させる。

**【根拠データ、資料】**

	提出無し
--	------

I-3. AP、CP、DP、3方針の整合性について 《点検担当：高久委員長、重松委員、教務第一課、中村委員、入試課》

**【事実(データ)に基づく現状説明】**

<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023年度応用生命科学研究科応用生命科学コース修了生の学修達成度をDPルーブリック表で評価を実施した(実施率100%、DPルーブリック表はレベル1～レベル4の4段階尺度)。学生の自己評価は3.25、教員の客観的評価は3.63であり、CPに沿った教育が十分に達成できていると判断できる。学生の自己評価と教員の客観的評価のギャップの解消は課題である【資料3_I-3-1】</li> </ul>
---

**【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】**

課題1	応用生命科学研究科における学生の自己評価と教員の評価のギャップ
上記の方策	学生の自己評価と教員の客観的評価のギャップ解消へ向けた協議を行い、改善に向けた具体的な施策(特に評価のギャップが大きかった「セミナー・学会等での口頭発表、文章作成能力」について、授業及び研究室指導時にDPと事例の関連性について学生への認識を深めるなど)を示し、実行する。

【根拠データ、資料】

資料 4_I-3-1	2023 年度応用生命科学研究科博士前期課程修了生 DP ルーブリック評価
------------	---------------------------------------

II. 教員・教員組織について <<点検担当：高久委員長、学事課>>

【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 応用生命科学研究科の教員数は、学生収容定員に対する大学院設置基準上の必要教員数を満たし、本大学院の教育研究方針を実践するための必要な教員数で構成している。【資料 4_II-1】 博士前期課程の応用生命科学コース、理科教職専修コース及び博士後期課程の大学院教員は、応用生命科学部の教員が兼ねて担当している。また、博士前期課程の薬科学コースは、薬学部の教員が兼ねて担当している。</li> <li>・ 応用生命科学研究科（応用生命科学コース/理科教職専修コース）教員 19 名のうち、30 代は 2 名、40 代は 5 名であり、また、女性教員は 1 名と、応用生命科学部と同様に若手教員、女性教員の割合が低い。学部教育と同様に、学生とのコミュニケーション、多様な視点、教育の継続性、女学生割合等から若手教員及び女性教員割合増加の必要性が考えられる。</li> <li>・ 教員間での授業担当時間はほぼ平準化されている。また、大学院授業科目は学生数に対して選択科目数が多いため、隔年開講にして、各授業科目の履修者を一定数確保し、グループワーク、ディスカッション等をできる教育環境を整えている。これは大学院の教員担当授業時間の負担減に繋がっている。</li> </ul>
---

【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】

課題 1	若手教員及び女性教員割合
上記の方策	若手教員及び女性教員割合の増加に向けた協議を行い、改善に向けた具体的な施策（若手教員、女性教員の積極的な採用など）を示し、実行する。

【根拠データ、資料】

資料 4_II-1	設置基準上必要専任教員数【大学院課程】
-----------	---------------------

III. 定員・学費の適切性について <<点検担当：高久委員長、学事課>>

【事実(データ)に基づく現状説明】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2023 年度の応用生命科学研究科の収容定員充足率は 72%（博士前期課程 88%、博士後期課程 44%）であった。【資料 4_III-1】 博士前期課程は 2022 年度 106%であったが、2023 年度 88%となり、未充足となった。</li> <li>・ 2024 年度入試結果による応用生命科学研究科の入学定員充足率は、博士前期課程 100%、博士後期課程 0%であった。【資料 4_III-2】 博士課程後期への入学については大きな課題となった。</li> <li>・ 学費は、他大学大学院の水準に合わせ、2023 年度入学生から年額 90 万円（2022 年度までの入学生 60 万円）に増額された。内部進学者が多数を占める実情から、内部進学者の学納金は国立大学大学院並みの 53.5 万円まで減額をしている（本学の学部卒業者及び大学院博士前期課程修了者については、入学金の全額、並びに施</li> </ul>
---

設設備資金の 2 分の 1 相当額を免除)。また、大学院生の存在は、研究室における教育と研究の質向上に大きく貢献している。このような状況を考慮し、2023 年度から大学院進学者の経済的サポートと積極的な後進指導推進の観点から、応用生命科学部授業に積極的に TA として雇用した。

**【課題など改善すべき点と、その改善に向けた方策】**

<b>課題 1</b>	応用生命科学研究科の収容定員、入学定員充足率
<b>上記の方策</b>	応用生命科学研究科の定員充足へ向けた施策を考慮し、入学定員の適切性の協議（内部進学者、企業からの社会人博士取得希望、留学生による学位取得希望）を行い、施策を示し、実行する。

**【根拠データ、資料】**

資料 4_Ⅲ-1	応用生命科学研究科 収容定員充足率
資料 4_Ⅲ-2	応用生命科学研究科 入学定員充足率